

B—58

黎明期の洋装とミシン

東京家政大

尾中

明代

1. 研究の目的

鎖国から開国への大きな転換は、被服および被服工作の上にも徐々に変化をもたらした。小論における洋装とミシンの関係もその一つである。一部和服の改良と併行して、洋服採用への歩みは、尊王攘夷の世界では遅々たるものであったに違いないが、非常の時の和服の不便は軽装にして動作の便利な洋服へと移行し、単なる観念的な排外意識でいることは済まされなくなった。このような時に、遣米使節の帰朝を第一歩としてミシンがもたらされ、文久元年武士の服制改革は、武装の洋装化へ一歩漸進し、和式の洋服へふみきる近因ともなった。陸海両軍の設置とともに、塩水にも丈夫な羊毛が重んぜられ、ミシン裁縫の第一歩がここから展開をはじめるのである。かくして筒袖、段袋あるいはダルマ服等の普及化につれて、ミシン裁縫の向上となり、明治初期、開成所、慶応衣服仕立局、あるいは開拓使のミシン伝習生の募集ともなって黎明期の洋装界をいろいろすることになるのである。以上のように幕末から明治にかけての洋装化の跡をたどるについて、その第1報としてミシンがどのように裁縫技術に採り入れられ、発達してきたかについて調べるのを目的とした。

2. 方法 各文献および資料等の調査による。

3. 成果 本題目に関する文献、資料は、各所に所蔵されているものなどを訪ね記録した。